

第6回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧



〔優秀書評賞〕

楠本 雅也（社会学部3年次生）

森 達也 『放送禁止歌』 解放出版社 2000年

山本 麻梨子（経済学部3年次生）

生野 照子 『リストカットの向こうへ』 新潮社 2009年

〔佳作〕

小林 寛史（経済学部2年次生）

マイケル・モーリッツ 『スティーブ・ジョブズの王国』 プレジデント社 2010年

石井 彩美（社会学部3年次生）

山田 登世子 『チャンネル最強ブランドの秘密』 朝日新聞社 2008年

田治見 圭祐（経済学部3年次生）

安藤 哲也 『本屋はサイコー！』 新潮社 2001年

増永 勝樹（経済学部3年次生）

湯浅 誠 『反貧困：「すべり台社会」からの脱出』 岩波書店 2008年

井上 知哉（経済学部3年次生）

ロバート・ウェストール 『ブラッカムの爆撃機』 岩波書店 2006年

〔総合講評〕

図書館長 経営学部教授 山本 順一

必ずしも‘豊かな人間性’につながるものとは思っていないが、人間がひとつの事件、事柄が多種多様な要素、利害関係から構成されており、それらを解きほぐしながら、総合的な比較衡量ができ、柔軟な論理的思考ができるようになるトレーニングとして、アタマの柔らかな若い人たちにとっては、読書が大切だと思っている。わたしのような年寄りには、廃用性萎縮からくる機能劣化のボケ防止のために、読書はかけがえのない価値をもつものだと認識を持っている。

濃密な読書習慣を身につけていただくひとつの教育

的手段として、学生諸君に書評を書いてもらうことは効果的で、その効果を極大化するうえで優れた作品を顕彰することは大いに意味があると思う。そのような趣旨の実現を図る‘桃山学院大学図書館書評賞’という年に一度のイベントも今回で6回目を数える。学内的にはすっきり定着をみた（今回の応募者が47名というのは、昨年度実績を大幅に下回っており、ちょっと悲しい現実である）。もっとも、個人的には、緻密な論理性を養うという観点からすれば、わずか1,500字程度というのはあまりにも分量的に少なすぎ、評者には物足りなさがついて回らざるを得ないという印象をぬぐえない。実際に図書館委員の先生方と一緒に審査にあたり、個々の作品を読んだわけであるが、取り上げた書物の構成、内容を紹介したうえで、自分なりの批評、批判、評価を加えるということでは、学生諸君にとっても相当に窮屈だったはずである

本論に入る。わたしを含め、各学部から出ている5人の教員が慎重な検討を加え、審議を重ねた結果、最優秀賞こそないが(繰り返しになるが、俳句や短歌ではあるまいし、こんなに少ない分量で衆目の一致する形で、大学生に期待する緻密で洒落た説得力のある人文社会科学的文章が整うとは、個人的には思わない)、優秀賞2点、佳作5点を選んだ。日頃から社会科学の基礎を身につけてほしいと学生たちに願っている、主として社会科学を専攻する教員が選考にあたったことから、対象としてとりあげた作品自体のもつ社会経済的な問題性が大きく影響し、私小説のような文学作品を結果的に排除するかたちになるのはやむを得ないと思う。以下、図書館委員の先生方のご意見を踏まえながら、書評の短評を記すことにしたい。

優秀書評賞に輝いたのは、楠本雅也さんの「放送禁止歌」と山本麻梨子さんの「リストカットの向こうへ」である。楠本さんは、大統領を正面からこき下ろして映画作品がつくれ、それを市民が楽しめる国と比較したとき、この国の流行歌を生み出す人たちとそれを放送する企業、関係者たち、さらにはリスナーたちとの間になかば無意識のうちに存在する社会性の欠如、明確な個性的価値観をもたぬ萎縮した精神構造を指摘する。山本さんは、若者たちにひそかに流行するリストカットが死ぬためのものではなく、ゆがんだ生の営みであることを伝えてくれる。

佳作は、小林寛史さんの「スティーブ・ジョブズの王国」、石井彩美さんの「シャネル:最強ブランドの秘密」、田治見圭祐さんの「本屋はサイコー」、増永勝樹さんの「反貧困」、そして井上知哉さんの「ブラッカムの爆撃機」の5作品である。小林さんは、昨2011年10月に死亡したアップル社の共同創業者であるジョブズについて、その付和雷同せず屹立した見方、ものの考え方がPCの黎明期から今日までを切り拓いた事実とそれが豊かな生き方につながっていることを読み解いている。「ブランドを自慢する馬鹿」な自分に気づいた石井さんは、20世紀のファッション界の革命家ココ・シャネルの富者の「金ピカ」を否定、身なりがパツとしている豊かな女づくりを目指した「働く女」に共感している。書籍小売店でアルバイトをしている田治見さんは、出版取次のパターン配本を否定し、具体的なマーケット分析にたつ往来堂書店のビジネス・モデルに感嘆の声をあげる。一見微温的で豊かそうに見える福祉国家に生活する増永さんは、ちょっとボタンを掛け違えるとたちまち「五重の排除」が作動し、「すべり台」を転がり落ち、巨大な貧困が口をあけて待っている日本社会の構造を何とかしたいと願う心優しい青年である。キタの將軍様が亡くなり、軍事的緊張が地元住民の望まぬ、同盟の神話のもとに外国軍基地の移転増強を進める状況の中で、井上さんはどの程度戦争というものを身近に感じているかは分からないが、第二次世界大戦の西部戦線でのイギリス空軍の秘話を描いた童話を興味深く紹介している。

本学の読書家たちが積極的に応募してくれたからこそ、この書評賞活動が大きな意義をもつ。もっとも、5学部全体からバランスよく応募し、受賞者の在籍学部もばらけていることが望ましいように思うが、残念ながら、経済学部の学生たちの特筆すべき活躍で終始したことには問題を感じ、新たな課題を抱え込んだような気がしないでもない。4万字の卒業論文を課す河内長野市の私立高校が図書館業界で拍手喝采を浴びていることに想到すれば、表面的な学力養成や就業力に注力するほか、この書評賞のあり方を見直し、本学の図書館利活用教育にももっと真剣に取り組むべきようにも思う。

いずれにせよ、めでたく書評賞の優秀賞、佳作の表彰を受けられる学生諸賢には、心よりおめでとうと言いたい。ほめてあげたい。そして、みずからの人生を豊かにするためにさらに読書に耽ってほしい。



〔優秀書評賞〕

森 達也 『放送禁止歌』

楠本 雅也 (社会学部3年次生)

「放送禁止歌」というのをご存知だろうか。その名の通りテレビ、ラジオで放送を禁止されている歌のことである。岡本信康の「手紙」、チューリップの「アップリケ」、泉谷しげるの「戦争小唄」、美輪明宏「ヨイトマケの唄」、なぎら健壱「悲惨な戦い」など。放送禁止歌に指定される理由としては、いくつかのものがあげられている。性や、差別問題、政治的な問題など、視聴者に対しての配慮から禁止されたと言われている。とりわけ差別問題は、デリケートな問題とされ、被差別部落を連想させるものは規制の対象となっていた。

テレビディレクターである森達也は、1999年5月にフジテレビの深夜番組で、ドキュメンタリー『「放送禁止歌」～歌っているのは誰？規制しているのは誰？～』を放送した。本書は森がその番組の制作過程をまとめて出版したものである。

放送禁止歌を追う中で、森はある矛盾に気付くことになる。放送禁止歌と認定されたものは、実際にクレームや批判を受けたものもあるが、むしろ自主規制された歌が多いということだ。特に差別的な問題を歌詞として含むとされてきたものは、解放同盟から強く糾弾されたというわけではない。そこにはマスメディアの側

にそれを未然に防ごうとする思惑があり、結果的に放送禁止歌を生み出す構造があったことを、森は明らかにする。深層にはメディア側が差別問題に対して、なんの興味、疑問を持つとせず、加速する情報の流れに身を任せ、「思考停止」してしまう現状があった。

著者がここで指摘するのは、思考停止がマスメディアだけに当てはまるのではないということだ。情報を提供する側のマスメディアは視聴者のニーズに応えようとしてきた。発信する側だけでなく、受けての側の思い込みもこれに加担する。つまり、視聴者側もそれについては考えもしていないということだ。何が正しい意識なのかなどは誰も分からない。だからこそ、そこにある問題に対して目を背けるな。という著者の言葉がすべてを物語っているのではないだろうか。

放送禁止歌として扱われている曲の多くは、昭和のフォークソングばかりである。平成になり二十年余り経つ現在、放送禁止歌は存在しないといってもいい。その背景には放送禁止歌の基準となる「要注意歌謡曲指定制度」は廃れ、放送禁止歌という言葉自体を耳にする機会がなくなったことがある。だが、もう1つの要因として反社会的な曲が作られなくなったということがあるのではないか。現在、巷を賑わす曲は恋愛を歌ったものが多く、社会的な曲を聞くことは少なくなった。著者が感じた、問題そのものに目を向けない風潮はさらに強くなっているようだ。現在の若者達はメディアが選定した曲を聴くことに馴らされ、音楽を通じ社会問題に興味を抱くということが減少しているようにも思う。問題から目を背けるなという著者の思いが込められた、現代社会に一石を投じる一冊である。

〔優秀書評賞〕

生野 照子 『リストカットの向こうへ』

山本 麻梨子（経済学部3年次生）

「リストカット」とは、何なのか。死にたいけど死ねないからするのか、注目されたいからするのか。ネットで「リストカット」を検索すると、リストカットをする理由がきちんと載っているが、誹謗中傷やリストカットをしている人たちの重い悩みも出てくる。何も知らずに興味本位でリストカットをしている人たちの掲示板を覗くと、悩みが洪水のようにあり、しんどくなるだけかもしれない。反対に誹謗中傷ばかりの部分を見ると、偏った知識しか得られないと思う。

著者は、心身症の患者を診療してきた。医師としての経験をふまえたフィクションであるが、リストカットがどんなものか知りたい方に向いていると思う。著者も

あとがきに書いているように、治療マニュアルや専門的な本ではないので、臨床心理的な専門的知識を得たいのであれば、この本は向いていない。

この物語の治療者が見る一人の少女の精神病の治療から、リストカットへいたる変化、そして治療者がどこまで少女に関わって良いのか、色々な葛藤が描かれている。その葛藤が本当に起こっているように描かれていて、とても良かった。また、少女と治療者だけに注目せず、とても重要な父親と母親の関係や過去がきちんと描かれていて良かった。

「生きるために血を流す」。この言葉を見たとき、リストカットする理由をまったく知らない人は驚くであろう。しかし、リストカットをしている人たちは少なくとも納得する人がいるであろう。血を見て生きているのだと実感し、安心して今日を終える。また、自分なんて生きている価値が無いと思い、自分を少しでも痛めつけて明日を迎えようとするなどが理由であった。どちらにしても血を流さなければ明日を迎えられないとは、どういうことだろうか。そうなるのは、何故なのか。それは、一番身近な家族関係であるらしく、この本もそれが問題だ。この本の場合、父親が家族・娘に与えなかったもの、母親が求める娘の理想から娘が求めていた家族愛が得られず自分の存在が分からなくなり、リストカットへ至った。簡単に言葉にしてしまったが、この本を読めば深く分かる。ぐれる事もできず、誰にも相談出来ず、物に当たることもできないのが全て自分自身に向かい、リストカットという形で表に出たのだ。この部分が治療者の言葉だけでなく、少女の家族関係の姿で濃厚に描かれていてとても良かった。

だが、人も様々であれば家族も様々である。この本は、あるひとつの家族のリストカットに至った少女の物語で、ほんの一つの例に過ぎない。当たり前だが、似たような悩みでリストカットをしていても少しずつ違う。そして、リストカットをするのだから死にたいという気持ちがあるのは確かだ。しかしながら、この世の中、死にたい気持ちで悩みながら自分を傷めるリストカットをしている人間もいれば、興味本位やファッションとして行っている人も存在する。だから、誹謗中傷がある。この物語の中でも、少女がリストカットを流行っていると言うが、それ以上は触れない。流行の一言で終えずに、興味本位でする人が存在するのだときちんと書いて欲しかった。書いていないと、病としてだけのリストカットしか知ることが出来ないからだ。

しかし、初めてリストカットを知るには、全体的に良い本である。内容が治療者・少女・父親・母親のそれぞれの目線で描かれているのが、本当に良かった。また、知っている人が読んでも、様々な視線・考えから「リストカット」という存在を再度考えさせられる内容になっていて良かった。



〔佳 作〕

マイケル・モーリッツ 『スティーブ・ジョブズの王国』

小林 寛史 （経済学部2年次生）

2011年8月24日、「カリスマ去る」という見出しで、スティーブ・ジョブズがアップル社のCEOを辞めるニュースが流れた。最近日本でも、ジョブズの発言や製品のプレゼンテーションの姿の報道や関連書の出版などで有名になっている。ネットで検索するとアップル社の共同設立者の一人、ディズニーの筆頭株主などの肩書や商用パーソナルコンピュータや iPod、iPhone での成功の経歴など、どれも世界的に影響を与えカリスマと呼ばれる所以がすぐにわかるが、なぜこのようにいくつもの大きな成功を収め、ビジネス界に限らず世界中の多くの人々が認めるカリスマになりえたのかを知らうとして、ジョブズの生まれた時から2010年までのことが書かれたこの本を書評の対象として選んだ。

ジョブズが最もすごいと思われていることは、コンピュータを一般の人向けに売り出したことである。ジョブズが売り出す前のコンピュータは大きくて扱いにくく値段も高かったので専門家が扱い、一般の人には無縁の物だった。しかし、ジョブズは誰でも簡単に使えるコンピュータを作れば儲かると考え、現在では一家に一台はある「パーソナルコンピュータ」の呼び名を作り、今ではあまりにも普通に使われているマウスを最初にパソコンに取り付けるなど、時代を先取りした考え方を持っていた。

また、ジョブズが製品を作るときにはいつも新しい機能や使いやすさに加えてデザインや発表の方法にこだわり、製品に関してはすべて自分が関わらないと気が済まない性格であることから、ジョブズの成功の理由が卓越した先見の明と細部にまでこだわる完璧主義の性格にあることがこの本を読むとわかる。

そして、この本は単に一人の人生を描くだけでなく、主役はもちろんジョブズだが共同創業者のスティーブ・ウォズニアクをはじめ、彼らの友人、仲間、同僚、ライバル、投資家などジョブズに影響した様々な人々の人生も細かく書かれている。これらの人々はコンピュータを現在まで発展、普及させるのに大きく貢献した人々であり、この本はコンピュータの歴史書でもあるように思う。

この本の良いところは、世間的にはカリスマと呼ばれ、神様のように扱われているジョブズの当初短気で自己中心的であった性格が、仕事を通じ様々な経験をすることで、相手に信頼される方法や相手と協力することの大切さを学び、少しずつ温厚に変わっていくことから普通の人間としてのジョブズが分かるようになっていくこと。また、この本はジョブズの人生を時の流れに沿って書かれているのだが、二章ごとにジョブズの言葉をタイトルのようにはさんで文章が書かれている

部分がある。そこにはアップル社の中での主要な出来事が小説のように周りの情景や登場人物の会話で書かれていて、その時の様子をはっきりと思い浮かべることが出来る。これによって専門用語が多く出てくるが、ただ難しいビジネス書にならずに読み易くなっていると思った。

悪いところとしては、写真が全くなかったことである。ジョブズの初期の発明品である Apple I や Macintosh など文章だけではわかりにくい部分があり、ネットで写真を見ると形などその時代の革新的なものであったことが改めてわかったので、写真を載せればわかりやすくなると思った。

しかし、カリスマと呼ばれるまでになったジョブズは、一生を通じて常にハングリー精神を持ち、周りと違うところに目を向けることが成功につながったことがわかり、学生の時に読むことで大きく人生観を変えることになる本だと思う。

〔佳 作〕

山田 登世子 『シャネル-最強ブランドの秘密』

石井 彩美 （社会学部3年次生）

本当の贅沢とは何だろうか。時代が新しくなり、世紀が新しくなるたびに、「贅沢」の意味が問われる。100年前、19世紀が終盤をむかえ、20世紀の幕が上がるとうする境で、ココ・シャネルがこの問いを放った。彼女だからこそ出来た成功の数々が、この本書ではつづられている。

本書の特徴は、説得力の強さである。それは、シャネル自身の言葉で語らせることにあり、シャネルの言葉の重みや強さをひしひしと感ずることができる。

当時のファッションは、貴族や一部の富裕の特権階級の女たちのものであった。金のかかった高価な素材がこれでもかとはばかりに使われた華やかな衣装に身を包み、そのゴージャスさを競っていた。彼女にとって「金ピカ」ファッションは本当の贅沢ではなく、その世界を拒絶することが彼女のクチュリエとしての始まりだ。彼女がモードの革命家となった理由は自分が嫌いなものを流行遅れにするためだった。1913年にリゾート地であるドーヴィルに店を開いた彼女は、それまでにモード界の表舞台に登場することのなかったジャージーという下着にしか使われない貧しい素材に光を当てた。そして、ドーヴィルという土地柄や世情などが関与し見事クチュリエとして最初の成功を収める。そこからシャネル・モードが発した。

シャネルのクチュリエとしての絶世期は今から90年

も前のことであるのにも関わらず、彼女の哲学は現代を見通していた。

1つは「金ピカ」を否定したシャネルは「宝石のカルットを自慢する馬鹿」を「高価な宝石をつけたからといって、女が豊かになるわけではない。身なりがぱっとしていなければ、宝石をつけてもぱっとしないままよ」と批評している。著者は当時の宝石は現代のブランドに当てはめられるとし、その言葉を「ブランドを持ったからといって、女がおしゃれになるわけではない」「身なりがぱっとしななければ、ブランドをつけてもぱっとしないままよ」といいかえている。それは、つまり「記号的価値」に基づく現代のブランドの仕組みをまさに言いあてている。私たちはこの言葉を重く受け止める必要がある。それはブランド品を持つことでまるで自分がハイソサティに属しているかのように感じる現代人の思考を変えていかなくてはならないからだ。

2つめは「恋か仕事」の選択である。シャネルは恋多き女であったが結婚か仕事かどちらを取るか悩んだ時期があった。しかし、仕事を選び生涯シングルでいつづけた。彼女は現代の「働く女」像と通じる部分がある。今日、女性の社会進出が当たり前となっているが、彼女の生きた90年前は今とは全く逆の世の中であったはずだ。それにも関わらず仕事に生きたシャネルは「働く女」の鏡でもあり、尊敬の念を持ってしまった。

恥ずかしながら、私はシャネルの嫌う「ブランドを自慢する馬鹿」であった。そのブランドのデザインや雰囲気、周囲の評価を基準に「シャネル」をはじめとするブランド群を眺めてきた。その為、そのブランドの誕生の理由や歴史などに関心を抱くこともなかった。しかし、本書を読み、1つのブランドが誕生するまでに、多くの出来事、人間関係、世情が絡んでいることに気づかされた。シャネルについて知りたいと思う人はもちろん、ブランドに興味がある人が手に取る一冊だ。また「働く女」として社会に出ている女性にも是非読んでもらいたい。当時のシャネルの言葉は現代の彼女たちに力を与えてくれる。

〔佳 作〕

安藤 哲也 『本屋はサイコー！』

田治見 圭祐（経済学部3年次生）

本書は、1996年書店の大型化に拍車がかかり町の小さな書店が次々と廃業していく中、往来堂書店というわずか20坪の書店を東京の下町である千駄木に開き、「町の本屋の復権」をテーマに掲げ、型破りな

経営手法で成功していく著者安藤哲也氏のサクセスストーリーである。それでは、本書の具体的な内容を紹介する。

本屋業界は1996年大型書店が台頭し始めてきた頃、町の書店はどの店に行っても同じ本が同じように並んでいるという意味で「金太郎飴書店」と揶揄されていた。しかし、趨勢となっていた大型書店にしても、「本はたくさんあるけど、欲しい本が見つからない」「疲れてしまう」という声を多く聞いていた著者は、ただ無造作に取次から送られて来たものだけ順番に並べていても面白い本屋ができるはずがないと考えていた。出版業界は取引が全国の取引書店に同じ商品を配本するというシステムが慣習となっている。その慣習を著者は批判している。既存の慣習に捉われず、著者自身が面白いと感じる本を売ることで、町の本屋の魅力を取り戻そうと企てる。この企てが功を奏し、往来堂書店は好調にスタートを切る。自身をアマノジャクな性格と述べ、型破りな経営手法を展開する著者は、雑誌は店の入り口に置くという本屋の定番配置とは逆の、雑誌は店の奥に配置する方法や大学病院が近くにあったので病院への配達を行ったり、DVを受けている人を対象にした、ある特定のお客様に的を絞って本を売り出すという手法を展開したりもした。また、著者は店のBGMにも相当なこだわりを持っており、当日の季節感や天候に合わせたBGMを流して店と音楽との調和を図った。このように、一般の本屋では実施されない著者の経営手法が往来堂書店を成功に導いたストーリーとなっている。

この本の興味深い点は、著者が「町の本屋の復権」という一貫したテーマを通して、書店はこんなにもエキサイティングな商売であるということ进行全面に出している所である。書店経営の良さを伝えることで、思わず自分も書店経営をしたくなるような文章で書かれていると考える。また、往来堂書店の往来堂には町の人々が日常的に行き交う場で、気楽に本を求めて立ち寄ってくれる店でありたいという著者の願いが込められているので、並々ならぬ思いも感じられる。偶然にも私自身本屋でアルバイトをしているので、この本を手にとった時は運命的なものを感じた。本屋はどこも同じ本が同じように並んでいるという文章を読んだ時は、確かにチェーン店であれば各店舗独自の魅力というものは少なく、どこの店舗も似たような店のレイアウトをしていると私も思った。既存の方法を一度は疑ってみて、周囲の反対があっても新しい事に挑戦するという姿勢が色濃く出ている本なので、何かに挑戦したいと考えている人の心の支えになる一冊ではないだろうか。



〔佳 作〕

湯浅 誠

『反貧困：「すべり台社会」からの脱出』

増永 勝樹（経済学部3年次生）

わたしたちは『貧困』は日本をはじめとする先進国には存在せず途上国にある問題ととらえてしまう。日本の国会議員たちの多くは、日本は福祉国家であり貧困とは程遠いと言うだろう。しかし、『貧困』は政府が認めたくないだけであって、政府が目をそらしている間に拡大し、進行し、手に負えない状態になってしまう。本書はこのことを『すべり台社会』という言葉で表現し、今の日本の社会制度のセーフティーネットが甘くなっており、うっかり足を滑らせてしまえば、どこにも引っかかることなく、最後まで落ちてしまい貧困状態に陥ってしまうことを指摘している。「ワーキングプワ」の実話、派遣会社の例、市役所の対応、政府の対応とさまざまな角度から日本の貧困問題が説得的に論じられている。

筆者は、大学在学中からボランティア活動をしており、その活動からホームレス、派遣労働者、生活保護受給者などの自立支援を行う団体、『自立サポートセンター・もやい』を2001年に設立し、彼/彼女をサポートしていた。そしてこれらの活動をするなかで大きな転換を迫られているのは『国の形』と考へ2007年10月に反貧困ネットワークを結成し、事務局長として貧困問題を政府に訴え、2011年3月16日、東日本震災を受け、内閣官房震災ボランティア連携室長に就任し、幅広いボランティア活動をしている。

貧困は自己責任ではないことを示すために、筆者は大きく2つの概念を挙げている。まず「五重の排除」である。それは第一に教育課程からの排除、第二に企業福祉からの排除、第三に家族福祉からの排除、第四に公的福祉からの排除、第五に自分自身からの排除、の5つからなる。そしてもう一つは「溜め」。金銭的、頼れる家族・親族・友人、そして精神的溜め。これら有形・無形のものであることからわざわざ抽象的な概念を使っている。この2つの概念から筆者は貧困を表現している。そして、この概念を使い実際の話で日本の貧困について切り込み、貧困は自己責任ではないことを、繰り返し読者に訴えかけている。

『貧困』と今日の日本で表の問題からは取り扱われないながらもどんどんと拡大しており、政府も見逃げない状態まで来ている。しかし、微修正を施すだけでは追いつかない状況にきていると筆者は心の心境を述べている。

『貧困』とは自己責任ではなく社会と政治に対する問いかけであり、その問いかけを正面から受け止め、逃げずに立ち向かう強さを持った社会を作りたい。これを読者に訴えかけて、関心を持ってもらうことが筆

者の切なる願いである。

本書には相談者の実際の話が出ているが、その後どうなったかがよくわからず残念なところといえる。また、表現としてはよかったが、感情的に書かれていて何を伝えたいか理解しにくいところがあった。

しかしながら『貧困』、『すべり台社会』という現実から、本当の社会の在り方を考えさせてくれる一冊である。

〔佳 作〕

ロバート・ウェストール『ブラッカムの爆撃機』

井上 知哉（経済学部3年次生）

本著は英国の童話作家、故ロバート・ウェストールによって著された「ブラッカムの爆撃機」を中心として、他二編を収録して新たに刊行された童話集である。ただし童話といえど、その題材となっているものは、私たちが「童話」と聞いて一般的に想像するメルヘン・ファンタジーではない。「戦争」、もっと詳しくいえば「第二次世界大戦の西部戦線」の中で起こった出来事をモチーフとした、戦争童話なのだ。

表題作「ブラッカムの爆撃機(Blackham's Wimpy)」は、英空軍の爆撃機無線手・ゲイリーが日常業務——対独夜間爆撃——の中で遭遇した事件の回想という体裁で綴られる。

1943年。新兵のゲイリーは同期の戦友4人と共に、名機長タウンゼンド大尉の下で爆撃機「C機」を飛ばすことになり、程なくして大尉を「親父」として慕うようになる。一方、基地の嫌われ者のブラッカム軍曹は、人格者のタウンゼンドとはまるで対照的な、粗暴でだらしなく、搭乗する「S機」の部下たちにも悪い影響を与える人物だった。

ある日C機とS機が共に帰投する最中、S機が敵機に狙われる。S機は間一髪逃れ、逆に敵機に致命弾を与える。独空軍の無線を傍受するC機の機内には、炎にまかれた敵操縦士の断末魔と、墜ちる敵をあざ笑うS機搭乗員の罵声が混在する。ゲイリーたちは非道な味方に憤ると共に、ドイツ兵の無残な最期に自分たちの行いを思い知らされる。

その数日後、S機に異変が起こった。無事に帰投したはずが、なんとブラッカムは人事不省となり、部下たちは皆自殺していたのだ。主のいないS機は予備機に回されるが、このS機で出撃した者達も、ブラッカムと同じ様に精神に変調をきたす事態が続出した。搭乗員たちはS機を避けるようになり、遂には水面下でサボタージュに及ぶ者も出る。

基地司令は状況打開のため、信頼するタウンゼン

ドに S 機での出撃を命じる。S 機に乗った親父と 5 人の新米達は無事任務を達成して帰路に就いたのだが、その最中、味方に降りかかった災難の秘密を知ることになるのだった。

児童文学ということもあり、文章は子供にも分かりやすい平坦な構成・表現で綴られる。その語り方が素朴な雰囲気醸し出し、万人が親しめる内容となっている。だが、戦争を安易な活劇や怪談にすることなく、真っ向からその実態に向き合った作風は、本著をただの戦争文学に留めない最大の要因となっている。戦いの中で苛まれる死の恐怖と殺人の罪悪感に耐えながら、それでも懸命に仕事をこなす飛行士たちの姿に引き込まれずにはいられない。ちなみに原題の「Wimpy」は、金網と布で作られたウェリントン爆撃機の愛称である。火の粉で全焼するこの頼りない機体は、主人公たちの危うさを象徴し、機内で起こる事件に緊迫感を与えるのに一役買っている。

また、状況描写の卓越さも見どころと言える。ゲイリーの話し言葉で綴られる文章は私たちに、閉鎖された機内の緊迫感、酒場で団らんする兵士の安堵感、今はもう失われつつある古き良き田舎の風景を、時に美しく時に凄惨に、ありありと伝える。

同時収録された二本の短編もまた、表題作に負けぬ良作である。失われたものへの愛情・理不尽な環境に立たされた人々の決断と成長をテーマとした話は、読者が子供から大人へ成長するたびに読み返したくなり、そのたびに新しい発見を生み出させる。

